なつかしまれた人

小川未明

青空文庫

町の運輸会社には、たくさんの人たちが働いていました。その中に、勘太というおじいさんがありました。まことに、人のいいおじいさんであって、だれに対してもしんせつであったのであります。

若いものたちがいい争ったりしたときは、いつもおじいさんが中にはいって仲裁をしました。

「まあ、すこしのことでそんなに怒るものでない。ここに働いているものは、いわば兄弟も同じことだ。たがいに力になり、助け合うのがほんとうだのに、争うということはない。すこしくらい腹がたつことがあっても忘れて、仲よくしなければならない。」といいました。

おじいさんに、やさしくいわれると、だれでもなるほどと思わずにはいられませんでした。そして、自分たちのしたことがまちがっていたと気づくのでありました。

おじいさんは、また仲間が、病気にでもかかると、しんせつにしてやりました。自分の家を離れて、他人の中で病気にかかっては、どんなに心細いことだろう、そう思って、できるだけしんせつにしてやったのであります。

こうした、おじいさんのしんせつは、みんなに感じられたので、いつか自分の親のように思ったものもあれば、またいちばん親しい人のごとく考えたものもあったのでした。

「おじいさんの生まれた国は、どこですか。」といって、聞いたものがあります。けれど、おじいさんは、答えずに、ただ遠い国だとばかりいっていました。

また、おじいさんには子供や、身頼りのものがいるかしらんと、そのことを聞いたものもあります。すると、おじいさんは、さびしく笑いながら、

「やはり、おまえさんくらいな、いいせがれがあるが……。」と、答えたのでした。

そんないいせがれがあるのに、どうして、こんないいおじいさんが旅へ出ているのだろう、なぜ親と子がいっしょに暮らすことができないのか……。おじいさんは、この年になって、自分の故郷を離れていたら、さびしかろうと思ったものもありました。

「おじいさんは、なぜこうして旅へなど出ているんですか。」と、若者の中の、一人は、その理由を知りたいと思って問いました。

おじいさんは、自分の身の上のことについては、なにを聞かれても、ただ笑顔を見せて、あまり語らなかったのであるが、

「自分の手足がきいて、働かれる間は、だれの世話にもなりたくないと思ってな……。子供たちのそばにいて働いたのでは、子供たちが、心配すると思って、それで旅へ出てきたのだ。」と、いったのでありました。

みんなは、はじめておじいさんの心持ちがわかったような気がしました。子供たちに対しても、そうしたやさしい心をもつのであるから、自分たちに対しても、やはりこうしてやさしいのであろうと思いました。

「じゃ、おじいさんは、いつかまた国へ帰んなさるときがあるんですね。」

「それはあるにはあるが、そうすると、こうして仲よくしているみんなに別れなければならぬ。考えると、そのことがつらいのじゃ。」と、おじいさんは、長い間、苦辛をしてきた、日にやけて、しわの

寄った顔をしゃくるようにして、小さな目をしばたたいたのです。破れた鳥打帽子の下から見える髪は、もう灰色になっていました。

この言葉をきくと、若いものたちも、ほっと歎息をつきました。

「俺は、自分の父親のように思っているのだが、おじいさんと別れるのはつらいな。」と、いったものがあります。

「ほんとうにそうだ。まあ、おじいさん、いつまでも俺たちといっしょにいてください。」と、いったものもありました。

こうして、勘太じいさんは、この会社に働いている若い人たちから、愛されていました。

おじいさんは、よく働きました。みんなの間にまじって、いっしょになって重い荷も運べば、またかついだりしました。たとえ、年をとっていても、仕事のうえで、若いものに負けることはなかったが、若いものは、なるたけ、この年をとった、しんせつなおじいさんをいつもいたわっていたのであります。

こうして、働く人々の社会には、美しい人情の流れる、明るいところがありました。そして、またこうしてしんせつなおじいさんが、だれか一人、若いものの中にいなければならなかったのは、ちょうど、人間の社会ばかりでなく、他の獣物の集まりの中でも、経験に富んだ、年寄りがいて、野原から、野原へ、山から、山へ旅するときには、その年とったのが道案内となって、みんなが、あとからついてゆくのと同じでありました。

勘太じいさんは、毎日、みんなといっしょに働いていました。しかし、ついに、みんなから別れていかなければならぬときがきました。しかも、それは不意であったのです。

おじいさんの息子が、田舎で成功をして、はるばるおじいさんを迎えにきたのでありました。

「おじいさん、長い間、苦労をさせまして申しわけがありません。私は、このほど、ようやく仕事のほうが都合よくいくようになりましたから、もうこの後おじいさんに苦労をかけることもないと思って、迎えにまいりました。弟や、妹たちは、はやくおじいさんの顔を見たいと待っていますから、どうかすぐに私といっしょに帰ってください。」といいました。

おじいさんは、息子の成功をしたというのを聞いて、どんなに喜ばしく思ったかしれません。どんなに、久しぶりで、子供や、孫たちにあわれるのをうれしく思ったかしれません。けれど会社にいるみんなから、しんせつにされているのを、別れて帰らなければならぬかと思うと、またかぎりなく悲しかったのであります。

「それは、まあなによりうれしいことだ。」と、口には、いいながら、おじいさんは、自分の着ている半纏や、汚れて土などのついている股引きを見ながら、すぐに帰ろうとはいわずにちゅうちょしていました。

息子はもどかしがって、

「おじいさん、さあ早く帰りましょう。会社の汽車にまにあわせたいものです。なにを考えていなさるのですか。こんなに汚れた半纏や、破れた帽子や、土のついた股引きなどは、もう用がないのですからお脱ぎなさい。そして、私がここに持ってきた、新しい着物にきかえて、早くここを出かけましょう……。」といいました。

おじいさんは、長い間、自分の身につけていた仕事着を未練惜しそうに脱ぎながら、

「せっかくそういって、迎えにきてくれたのだから、どうしても帰

らなければなるまい。俺はまだ、もうすこしくらいはここにいて、働いていたいのだけれど……。」と、独り言のようにもらしていました。

おじいさんは、新しい着物にきかえて、自分のいままで身につけていた半纏や、股引きや、破れた帽子をひとまとめにして、そばにあった、貨物自動車の荷の上に乗せておきました。

「さあ、おじいさん、仕度がすんだら、すぐに出かけましょう。」と、息子はいいました。

おじいさんは、そこに居合わせた、仲間に別れを告げました。すると、その人たちは、

「おじいさん、あんまり急じゃないか。名残惜しいな。しかし、めでたいことで、なによりけっこうだ。無事に暮らさっしゃい。」といいました。

「さよなら。」

「達者で暮らさっしゃい。」

仲間は、口々にいって、おじいさんの出てゆく姿を名残惜しそうに見送っていました。それから、みんなは、また、自分たちの仕事にとりかかって忙しそうに働いていました。

このとき、一台の貨物自動車が、会社の門から出て、町を過ぎ、ある田舎道にさしかかったのであります。車の上には、世帯道具がうずたかく積まれていました。

もう、やがて春になろうとしていたが、まだ寒い風が、野や、林を吹いていました。雲切れのした、でこぼこのある田舎道を貨物自動車は、ちょうど酔っぱらいの人の足どりのように、躍りながら、ガタビシといわせて走っていたのでした。たぶん、ある家の引っ越しででもあるとみえます。車台の上では、机が、いまにも道端へ飛び出しそうになるかと思うと、箱が、いまにも転げて落ちはしないかと見られましたが、それでも、それらは、車にしがみついて乗せられたまま走っていました。ちょうど、そのとき、なにかしらない別のものが、道の上に落ちたのです。自動車は、そんなことには気づかず、そのまま走り過ぎてしまいました。そして、さびしい道には、だれも見ているものはありませんでした。

車の上から、落ちたものは、勘太じいさんの会社を出るときまで身につけていた、半纏と股引きと帽子でありました。おじいさんが、ひとまとめにして、荷の上に乗せておいたのが、そのまま走り出して、ついに振り落とされたのであります。

日暮れ方を告げるからすが、あちらの林の方で鳴いていました。町の会社では、その後、みんなが思い出しては、勘太じいさんは、どうしたであろうとうわさしましたけれど、おじいさんからは、そののち、なんのたよりもなかったのです。そして、みんなからも、だんだん忘れられていこうとしました。

かれこれ一年ばかりもたってからのことです。会社で働いている一人の若者が、ある日、町から五里ばかり、東の方へ離れている街道を貨物自動車で通ってくると、勘太じいさんが、ここに働いていた時分のようすそっくりで、とぼとぼと街道を歩いているのを見たといいました。

おじいさんを知っている人々は、この話をきくと目をみはりました。

「それは、人違いだろう……。おじいさんは、息子が迎えにきて、新しい着物にきかえて帰ったのだから、また昔のようすにかえると

いうはずがない。」と、あるものはいいました。

「いいや、勘太じいさんに相違ない。俺は、よほど、自動車を停めて、声をかけようと思ったが、急いでいたものだから、つい残念なことをしてしまった。」

「おじいさんを見て、自動車を停めないということがあるものか？」

「しかし、おじいさんなら、困れば、またここへやってくるにちがいない。」

「いや、ああしていったん帰ったのだから、きまりわるがっているのかもしれない。人間の運命というものは、いつまたどんな境遇にならないともかぎらないからな。」

「俺、こんど見つけたら、無理にも自動車に乗せてつれてこよう……。」と、若者はいったのでありました。

　ある日のこと、おじいさんを見たという若者は、また自動車に乗って、その街道を走っていたのであります。

「いつか、この街道で、おじいさんを見たのだが、見つかってくれればいいがな。今日ばかりは、おじいさんをつかまえてやろう。そこで、場合によったら、自動車に乗せてつれてゆこう……。」と、前方をながめながら思っていました。

　あちらに、森があって、その下に人家の見えるところへ近づいたときに、若者は、行く手に勘太じいさんが、あの破れた帽子をかぶり、見覚えのある半纏を着て、股引きをはいて、その時分よりはずっと元気がなく、とぼとぼと歩いている後ろ姿を見たのであります。

「おお、おじいさんがゆく……。」といって、若者は、それに追いつくと自動車を止めました。

「勘太おじいさんじゃないか？」と、若者は、わめきました。

　おじいさんはたちどまりました。そして、うしろを振り向きました。

「勘太おじいさんじゃないか……。」

「ああそうだ。」と答えました。

「おじいさんか……。」といって、若者は、顔をのぞくと、いつのまにかひどくおいぼれて、両方の目が腐っていました。

「おまえは、どうして、そんなにおちぶれたい……。」といって、若者はため息をついたのです。

「いろいろ不幸がつづいてな。」

「息子さんは、どうしたい。」

「死んでしまった。」

「それは！　おまえも不運なことだのう……。なぜ、また早く、町へ出てこなかったのだ。」

「町へ……。」

「これからゆくか？　もう、おまえに、そんな元気がないか？」

「ああ、ゆく。」――若者は、あまりに変わりかたがひどいので、どうしようかと思いましたが、みんなについていって、おじいさんを見せてやりたいような気もしました。

　このとき、あちらから、若い女と、子供らがこちらへ駈けてきました。

「おらのおじいさんを、どこへつれていかっしゃるつもりだ。」と、女は大きな声でいいました。

　若者は、びっくりしました。

「町へ……。」

「町へ、なにしにさ。だれがたのんだい。」

「俺は、勘太じいさんと、町でいっしょに働いたものだ。」

女は、あきれたような顔つきをして、

「勘太じいさんなんて知らない。うちのおじいさんは、もうろくしているで、働けやしない。」

「じゃ、人違いか……。この着物はどうしたのだ。」と、若者はききました。

この貧乏な、もうろくをしたおじいさんは、どこからか、捨ててあったのを拾ってきて、それを着ていたということがわかったのです。若者は、このおいぼれたじいさんが、勘太じいさんでなかったのをしあわせと思いましたが、またべつな痛ましい感じがして、そこを立ち去りました。なにも知らぬ子供らはめずらしそうに、あちらを向いて、自動車の遠ざかりゆく影を無心にながめていたのであります。

――一九二六・一――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　5」講談社
　　1977（昭和52）年3月10日第1刷
底本の親本：「未明童話集2」丸善
　　1927（昭和2）年9月20日発行
初出：「童話」
　　1926（大正15）年3月
※表題は底本では、「なつかしまれた人《ひと》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：栗田美恵子
2020年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

なつかしまれた人

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/